退職者に贈る言葉

人生への情熱

広島大学長　原田康夫

のたび本学より五十八名の方が退職される。長年広島大学に勤めていただき、広島大学の発展のために人生の大半を捧げられた方々です。

昨年の広大統合移転完了記念事業は、全学一丸となって取り組んだ一つの大きな思い出でもあり、かつての学園紛争ももう遠い昔のこととなり、今では懐かしい出来事のようにさえ思えます。ようやく広大が東広島キャンパスへ統合され、真の総合大学へと発展する矢先であるだけに、皆さんが去って行かれるのは、私としてはつらい気持ちであります。とは言え、皆さん健康で退職されるわけですから、やはり、おめでとうございますという言葉で送るべきでしょう。

さて日本の政治も不透明で、退職しても昔のように何もしないで暮らせる時代ではないようで、どなたもいろいろと考えておられることでしょう。やはり退職時に一番大切なのは健康であり、これからの人生に対する意欲であります。これからの目標を十分に定めて、その方向に向けて情熱を持って歩むことが、老いない秘訣ではないでしょうか。それには何か仕事以外の、自分の好きな事をすることが大切です。

私は、義母（八十九歳）ともう三十年以上も一緒に暮らしていますが、足も、眼も不自由であるのに、義母は毎日絵を描いています。私は身近な花、果物などの画材を、朝出勤する時に義母がいつも座るソファーの前において出て来ますが、帰った時には、小さなキャンバスに何等かの形にしています。昭和三年東京女子美の卒業ということではありますが、絵を描くという毎日毎日の精進が心の安定をもたらすようで、若い頃は喘息持ちでいつ死ぬか分からないと言われていたにもかかわらず、今なお元気に過ごしています。年を取ってもいつまでも楽しめるものは好きな芸事だけかな、と最近は思いだしました。

どうか皆様、これからも健康に気をつけられ、楽しく充実した人生を送っていただくことをお祈りして、お祝いの言葉といたします。

長い間、御苦労様でした。

教官退職者

特集

総合科学部ヨーロッパ研究講座

戸田吉信

〈部局歴〉
昭37・4　（金沢大学）
49・6　総合科学部

昔日ノ齷齪誇ルニ足ラズ

記憶の片隅に眠っていた一編の漢詩が、このところ何かと思い出されます。作者は孟郊（字は東野、七五一～八一四）という人で、冒頭の一句を受けて、「今朝放蕩ニシテ思イ涯テ無シ　春風意ヲ得テ馬蹄疾シ　一日看尽クサン長安ノ花」と続きます。

四月一日、春眠を心ゆくまでむさぼりたい、まさに無上の放蕩ではないか。女房よ、新聞をもて、煙草、茶をもて。春風はわが意を得るがごとく、馬ならぬ車の足取りは早い。女房よ、しかと運転せよ。目指すはむろん、ひねもすのたりのたりの瀬戸の海。

都合よく翻訳すれば、こういったことになるでしょうか。ただし、実際にはこうはいかないと思います。全身の骨が肉から離れてばらばらになったように、多分、しょぼくれているでしょう。四十六歳にしてやっと進士の試験に合格し、意気揚々とこの詩をものした作者ですが、実人世、官途においては不遇だったようです。

長い間、お世話になりました。五十周年の記念祭に、またお伺いしたいと思います。

＊　＊　＊

先生のご専門は近代フランス文学で、ご研究の結晶は、ずっしりとしたご本の「フロベール研究」となっています。

また先生は釣りがお好きで、この数年、評議員、学部長、学長補佐、という要職にあって、お忙しいにもかかわらず、ゼミ生や院生をひき連れて釣りに行かれ、彼らにフランス文学研究の醍醐味だけでなく、釣りのおもしろさをも味あわせておられます。この四月からもある大学院大学でお仕事をなさいますので、お好きなだけ釣りに没頭できる時がくるのはまだ先のことのようです。

（総合科学部ヨーロッパ研究講座　木幡藤子　記）

総合科学部自然環境研究講座

浅井冨雄

〈部局歴〉
昭34・3　（京都大学）
34・10　（気象研究所）
42・12　（京都大学）
48・4　（東京大学）
平5・4　総合科学部

大学院生たちと，釣った魚で魚飯
わが研究室恒例の野外ゼミ風景